

「離縁」

マルコの福音書 10:1~12

はじめに

今日の箇所は表面的には「離縁」すなわち夫婦の離婚についてのものとなっています。近年、国内外における離婚率の増加がニュースなどで度々取りざたされていますが、今日の内容を読みますと離婚は昨今の問題ではなく、モーセの時代、つまり今から三千年以上も昔からすでにあった問題であることがわかります。しかしここでイエシュアが語っておられることは、そんな世間一般のニュース、テレビのワイドショーのネタと同類のようなものではありません。イエシュアは神の国の奥義、神のご計画について話される時、多くのたとえを用いておられることを忘れてはなりません。つまりこの離婚問題にたとえて、イエシュアはここでも神のご計画がどのようなものであるのかを表しておられるということなのです。今日もそのような視点で、聖書を読み解かせていただきたいと思います。

1. ユダヤとヨルダン

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:1 イエスは立ち上がり、そこからユダヤ地方とヨルダンの川向こうに行かれた。群衆がまたイエスのもとに集まって来たので、再びいつものように彼らを教え始められた。

イエシュアは「ユダヤ地方とヨルダンの川向こうに行かれた」とあります。一見何の変哲もないただの状況説明のように見えます。しかしここに記されている様子、描かれている情景は「神の国」を表す一つの「型」だと考えられます。なぜならイエシュアは神がお選びになった人々、すなわちイエシュアをメシアとして信じる人々をご自分のみもとに集め、その人々を直接教導くようになる世界こそが「神の国」の実現した姿だからです。それが「群衆がまたイエスのもとに集まって来たので、再びいつものように彼らを教え始められた」という記述には「型」たたとえとして表されていると考えられます。ここに使われている「教える」という意味のヘブル語ラーマド(למד)は本来、神がご自分の民にお与えになる土地をイスラエルの民が所有する、そこに入ることを指し示す言葉として用いられました。

申命記【新改訳 2017】

4:1 今、イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。

このようにラーマド「教える」という言葉には本来、上記のイスラエルの民に対する神のご計画が指し示されているのです。かつて神は彼らイスラエルにその所有地を与えようとされました。しかしこの民は神に逆らい、聞き従わなかったために、それを失ってしまいました。しかし終わりの日に、神は再びこのご計画を、今度は御子イエシュアによって成就しようとしておられるのです。その事実がこの「群衆がまた

イエスのもとに集まって来たので、再び…」という記述には指し示されていると考えられます。ちなみにここでイエシュアが行かれたこのヨルダン川流域はかつてこのように呼ばれていました。

創世記【新改訳 2017】

13:10 ロトが目を上げてヨルダンの低地全体を見渡すと、…その地は…【主】の園のように…よく潤っていた。

このように、「ヨルダン」はかつて「【主】の園」つまり創世記に記されたエデンの園のようであったとあり、イエシュアは神のご計画が、地上に再びエデンの園のような世界を取り戻す、回復させることにあることを指し示すために、あえて「ヨルダンの川向こうに行かれた」のだと考えられます。「ユダヤ」人とも呼ばれるイスラエルの民のその所有地を「【主】の園」エデンの園のように回復させること、それが神のご計画の完成である「神の国」の一つの現われ、成就された姿です。イエシュアはこの事実を「型」たとして表すためにあえて「ユダヤ地方とヨルダンの川向こうに行かれた」のだと考えられます。このように、聖書に記されたこと、イエシュアのなされたことには無意味なこと、軽視しても良いことなど一つもないのです。そしてこれらの意味と内容を踏まえた上で、次からの節に記された出来事を見ていくなれば、それが単なる夫婦の離縁、離婚という人の問題についての善悪を問ひ、そのよし悪しをはかるためのものではないということがわかります。

2. 頑な

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:2 すると、パリサイ人たちがやって来て、イエスを試みるために、夫が妻を離縁することは律法にかなっているかどうかと質問した。

10:3 イエスは答えられた。「モーセはあなたがたに何と命じていますか。」

10:4 彼らは言った。「モーセは、離縁状を書いて妻を離縁することを許しました。」

10:5 イエスは言われた。「モーセは、あなたがたの心が頑ななので、この戒めをあなたがたに書いたのです。」

「夫が妻を離縁すること」についてのイエシュアとパリサイ人たちとの問答が記されています。パリサイ人たちが引用しているモーセの律法、正確には神が定め、モーセに書かせた律法にある離婚についての教えとは以下のものです。

申命記【新改訳 2017】

24:1 人が妻をめとり夫となった後で、もし、妻に何か恥ずべきことを見つけたために気に入らなくなり、離縁状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせ、

24:2 そして彼女が家を出て行って、ほかの人の妻となり、

24:3 さらに次の夫も彼女を嫌い、離縁状を書いて彼女の手渡し、彼女を家から去らせた場合、あるいは、彼女を妻とした、あとの夫が死んだ場合には、

24:4 彼女を去らせた初めの夫は、彼女が汚された後に再び彼女を自分の妻とすることはできない。それは、【主】の前に忌み嫌うべきことだからである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えようとしておられる地に、罪をもたらしてはならない。

確かにパリサイ人たちの言う通り、「離縁状を書いて妻を離縁すること」が記載されています。しかしこの教えは離婚を容認、擁護するために書かれたものではなく、むしろその逆で一度離婚してしまえばもはや「初めの夫は…再び彼女を自分の妻とすることはできない」という掟であり、だから軽率に離婚すべきではない、「結婚がすべての人の間で尊ばれるようにしなさい（ヘブル 13:4）」という教えなのです。そしてイエシュアは「モーセは、あなたがたの心が頑ななので、この戒めをあなたがたに書いたのです」と言われ、この離婚、いや結婚を尊ぶ戒めが、「心が頑なな…あなたがた」に対するものだと言っておられます。つまり律法に記された結婚とは、イスラエルの神である主と「あなたがた」すなわちイスラエルの民、ユダヤ人たちとの関係性、結びつきを表したものであると説いておられるのです。神は諸々の国々の民の中からただアブラハムだけを選び、こう言われました。

創世記【新改訳 2017】

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

このように、神はアブラハムに「あなたの実家を出て、わたしの家で暮らしましょう」と同じ内容のことを言われたのです。これはまさに求婚、プロポーズの言葉です。アブラハムはこの御言葉に応答し、そして神は彼と彼の子孫であるイスラエルの民と、またそれにつながるすべての者を永遠に祝福するという約束、永遠の愛の誓いをなさいました。イエシュアはモーセの律法に記されたこの結婚についての戒めとは、神とイスラエルの関わり、つながりが花婿と花嫁、夫と妻の関係に表されているということを前提とした上で、「心が頑なな…あなたがたに…」と言われたのです。なぜならイスラエルの歴史は、神がモーセを通して彼らをエジプトの奴隷から解放された日から今日に至るまで、常に逆らいどおしであるからです。

申命記【新改訳 2017】

9:7 あなたは荒野であなたの神、【主】をどれほど怒らせたかを忘れずに覚えていなさい。エジプトの地を出た日からこの場所に来るまで、あなたがたは【主】に逆らい続けてきた。

このように、夫である神にとってイスラエルというこの妻は非常に反抗的で質の悪い妻なのです。さらにこの妻は他の男に浮気する、すなわち偶像礼拝に走る姦淫の女です。まさに先ほどの申命記 24:1「妻に何か恥ずべきことを見つけたために気に入らなくなり、離縁状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせ」ても良い状況です。しかしもし神がそうなされれば、イスラエルは偶像の神々と再婚し、もはや彼女は二度と神と結ばれることはなくなってしまいます。それは神が「申命記 24:4 彼女を去らせた初めの夫は、彼女が汚された後に再び彼女を自分の妻とすることはできない。それは、【主】の前に忌み嫌うべきことだからである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えようとしておられる地に、罪をもたらしてはならない。」とご自分で定めておられるからです。ですから神は、ご自身とイスラエルの結

婚が、夫婦関係が「すべての人の間で尊ばれる」ために、たとえどんなに「**心が頑なな**」妻であろうとも決して「離縁状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせ」ることはないのです。そして神がその妻であるイスラエルと決して離縁されないことを、イエシュアは次の箇所でこのように言い表しておられます。

3. 神が結び合わせたもの

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:6 しかし、創造のはじめから、神は彼らを男と女に造られました。

10:7 『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、

10:8 ふたりは一体となる』のです。ですから、彼らはもはやふたりではなく、一体なのです。

10:9 こういうわけで、神が結び合わせたものを、人が引き離してはなりません。」

イエシュアは創世記の御言葉を用い、神とイスラエルの「**男と女**」の関係、夫婦関係が「**創造のはじめから**」定まっていた神のご計画まさに「**神が結び合わせたもの**」であることを述べておられ、このご計画、関係が何者によっても決して「**引き離**」すことはできない、「**離縁**」できないことを強調しておられます。ですから「**離縁などありえん**」というわけです。ちなみにここで「**男と女**」と訳されているヘブル語、ザーハル(רָזַח)とネケーヴァー(הִקְבִּי)はそれぞれ「記憶する、覚える」という意味のザーハル(רָזַח)と「指定する」という意味のナーカヴ(קָבַע)が語源であると考えられ、この事実からも神がご自分とイスラエルとの夫婦関係をはじめから「指定され」これを「覚え」、決して忘れない、離縁しないことが表されていると考えられます。

そしてここでイエシュアは神とイスラエルの夫婦関係が、やがて結ばれるイエシュアご自身とイスラエルとの関係、これは夫婦というよりは許嫁(いいなずけ)、婚約の関係を表していることを重ねてたとえておられます。それが「**男は父と母を離れ、その妻と結ばれ…ふたりは一体となる**」という御言葉の引用に表されています。なぜならイエシュアは天の御父のもとを離れ、その母(これは創世記 3:20 から生きること、いのちの象徴と考えられる)を捨て、十字架にかかられて死なれました。その結果イスラエルのすべての罪の贖いがなされ、やがて「**神の国**」においてメシアであるイエシュアはイスラエルとともに住み、ともに歩むようになるからです。また使徒パウロはこの御言葉はキリストすなわちメシアであるイエシュアと教会との関係をも指し示していることを明言しています。

エペソ人への手紙【新改訳 2017】

5:31 「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」

5:32 この奥義は偉大です。私は、**キリストと教会**を指して言っているのです。

私たちは異邦人の教会ですが、教会とはそもそもイエシュアの弟子たち、すなわちイエシュアをメシアとして信じるユダヤ人たちによって、エルサレムから始まったのです。ですからどの教派のどの教会であれ、認めようが認めまいが、イエス・キリストすなわちイエシュアを神の御子メシアとして信じ、聖書の御言葉を信じる教会はみなイスラエルの民、ユダヤ人とつながっているのです。ですから私たち教会もまた神が結婚についての戒めとして律法、聖書に記されたように、私たちがどんなに「**心が頑なな**」妻、また花

嫁であったとしても神に、イエシュアに離縁されるということはありません。まさにこう記されているとおりです。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

8:38 死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、

8:39 高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

「創造のはじめから」神はイスラエルを、教会をご自分の妻として、またイエシュアの花嫁として選び、これを定められました。天にも地にも、また地の下にもこれを覆す術はなく、それができる力を持ったものも存在しません。いと高きまことの神、唯一の神ご自身が定められたものですので、万が一神ご自身がこれを変更また削除したいと思ったとしてもそれはできないのです。私たちに与えられている救いの約束、神のご計画としての福音は、なんと堅く、なんと重く、なんと揺るがないものなのでしょう。

4. 姦淫

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:10 家に入ると、弟子たちは再びこの問題についてイエスに尋ねた。

10:11 イエスは彼らに言われた。「だれでも、自分の妻を離縁し、別の女を妻にする者は、妻に対して姦淫を犯すのです。

10:12 妻も、夫を離縁して別の男に嫁ぐなら、姦淫を犯すのです。」

イエシュアはここで「離縁」はもはや「姦淫」と同じであると述べておられます。パリサイ人たちは「モーセは…離縁することを許しました」と言いましたが、それが「姦淫」の罪にあたるならば、それは許されません。

出エジプト記【新改訳 2017】

20:14 姦淫してはならない。

とあるとおりです。ですからやはり神が、イエシュアがイスラエルを、また教会を「離縁」することは…ありえんということです。

5. 降りて来る

先に記されていたように、イエシュアはこれらの御言葉をユダヤ地方、ヨルダンの川向うで語られました。ユダヤとは「(主を) ほめたたえる」という意味のヤーダー(יהודה)を語源とし、つまりユダヤ地方とは「主をほめたたえる者の地」という意味があるのです。そしてこのヨルダンという名はヤーラド(ירדן)「下る、降りる」という意味の言葉が語源となっており、それは本来、神が天から地に降りて来られることを意味する言葉なのです(創世記 11:5)。やがてイエシュアはこの地上に再臨されます。そして主イエシュ

アをほめたたえる、あがめる者たちを集め、ユダヤ人たちの地を、かつてヨルダンもそう呼ばれていたように、これを主の園、エデンの園のように回復され、これを中心に全世界を神の祝福で満たされます。これが実現する時、結婚、夫と妻についての戒めに表された、神とイスラエル、イエシュアと教会の関わり、交わりが抽象的なもの、目に見えないものではなく、目に見える現実となって、私たちもその中に生きる者、生かされる者とされます。それが「神の国」の到来、その成就、完成です。ですからイエシュアがメシアとしてこの地上に降りて来られない限り「神の国」は実現、完成しないのです。イエシュアは約二千年前に実際に十字架にかかれ、そして実際に死からよみがえられ、そして弟子たちがその肉眼で見ているまさに目の前で天に上って行かれました。ですからイエシュアはやがて必ず、文字通りの有様でこの地上に降りて来られます。その日を覚え、その驚くべき光景を思い浮かべ、思い巡らしながら、その時に向かって今を生きる、歩む者とならせていただきますように。聖霊の助けがありますように。